





於 183  
7

夫ハさておれ爰あゝ又名護屋山三郎元春ハツ大桂之助おのゝつ小前こまへ  
 著三人みの古ふるふとたがれそその安否やすひをさひ。二ツハ父ちちの仇うらみ不破伴ふたへ  
 門かどをたがれぬて宿意しゆくいをとげりや心こゝろハ二ツ身みハ二ツ心こゝろを、  
 僕わが麻あし具ぐて処ところ方かたを尋たづねありしれ。あつてく旅中りゆうちゆうハ月日つきひをふり  
 けり。又また旅りゆう宿しゆくのうちハ不思議ふしぎの夢ゆめをみる。その夢ゆめハいふとる也。  
 此こゝハも蓋おほせ南みなみ盆ぼんの時ときあて父ちちの亡な霊たまをまらふとむと。香かう華け灯とう燭そくとわく丸  
 為な街まちハ出でけり。民家たみか一いち茅かやハ霊たま棚たなをまらけ。庭火にわびをたけりて亡な霊たまを迎むかへ  
 念ねん仙せんの声こゑ念珠ねんじゆの音ね街まちハさつ。あつての亡な者ものもほとひ来て、功こうのこゝで  
 切きつてこの家いへハ入いる為ため体たい誠まことハ哀あはれのあつてさぬり。亡な者もののこゝで  
 さぬぐ。あつて額ひたひハ波なみをたふたふ。夕ゆふ月つきハあつて。腰こしハ弓ゆみを張はりたる。焼やむの  
 若男わかおとこの幼子わらわこの手てをひくもあつて。若女わかおんなの乳ちちぶささる。ぬめ。嬰あや子こハ泣な懐なみ

縁

...

...



まゝもあやし雨露ふさねたる骨のほげに男も女も口ぢりぬ  
たる影もひととほの薄又えそ浪と踏ここの由も来りぬく年よりし  
亡者や頬鬚生まけりていとわびしき男のつまも肉脱もせむか  
しくえあふそのあけの亡者あふん白髪を乱せる焼の亡者庭火の  
かげふらふひくろ切るる子の顔をほにのぞれんとてさめぐこなくい孫の  
心の残りほろり白界ひびく口由にていと醜男の亡者ひび火たぐ女  
ほれいとわづらひてうとせしげふ立たる後の夫とむらへたる恨と泣  
かくさめぐの亡者蜂のごとく群蟻のごとく集来れども家くの  
男女の目あふ少もえつがる様子有ぬ山三郎おのれも命あつそ  
亡者の数ふ入るうと一度はかどろに蜻蛉の一期朝露の命泡沫  
死常老少不定の世のあらひ皆あぐのこしと二度の致すそたぬ

ける所ふ背後の方山三郎くとよぶ声虫のなく音小異あふ山三  
郎外をひらぐへそうねをえぬ正しく亡父三郎左衛門をぬらうち  
おどろけつ平伏しそ礼をほ世を去あふ親人ふ又あふ妻の不思議  
さうとつが三郎左衛門のひけら汝我仇をむくらんそ身を苦しめ  
みひを尽さを苔の下を不便ふるひこれまでめらけぬせしぞ  
汝伴左衛門をめいとめんとあふ他をもむる死益ありそや京都  
小立起るんぢが幼年の時ひびけつる女をたぐぬて相まへんけ  
おのぐう伴左衛門おめづりあふぢいひ妻を告ん為小まをまを  
ど親子ハ一世のちぢり有ぬが再まもあふ妻を得たじといひとて  
さうんとまも袖ふまづりせめて今まがまちまの世とのかたとあふ  
替まめて旅店の寝所ふ只独惘然世に居るけり五更の鐘ふ



おどろけて。ヤリ。林。焚。ある。こと。と。曉。悲。歎。小。袖。を。志。ぢ。け。て。か。そ。山。三。郎。父。の。告。ふ。ま。う。せ。い。と。元。京。都。不。立。越。て。小。幡。の。里。お。あ。げ。有。家。を。め。と。め。麻。糸。め。ろ。も。住。け。る。び。じ。く。旅。中。お。あ。り。て。少。く。の。た。く。も。皆。め。ら。ひ。尽。し。素。も。あ。り。ひ。あ。る。さ。り。あ。れ。ば。持。合。せ。た。は。衣服。の。た。ぐ。ひ。も。お。や。く。不。賣。尽。し。て。目。ぐ。の。ほ。の。み。か。は。至。極。賣。さ。ら。じ。あ。れ。ば。も。麻。糸。忠。義。の。心。あ。り。者。あ。ら。ば。毎。日。煎。ト。物。賣。賣。ふ。出。て。身。体。の。瘦。あ。る。と。も。い。と。い。は。れ。ど。ヤ。リ。く。か。そ。け。さ。煙。を。と。ど。ま。け。る。

○案。多。煎。ト。物。賣。古。更。老。文。明。の。比。の。職。人。尽。の。う。ち。お。又。也。又。能。狂。言。不。見。ト。物。賣。と。い。ふ。あ。り。葉。を。煎。ト。と。い。ふ。ひ。賣。と。い。ふ。者。と。ぞ。

大花柳の朝當

其。頃。都。五。條。坂。小。伎。樓。あ。り。原。此。所。い。平。家。の。侍。大。将。悪。七。兵。衛。景。清。が。妾。阿。古。屋。が。住。し。処。と。ぞ。その。あ。ら。り。あ。や。あ。や。この。阿。曾。比。あ。り。て。秦。樓。の。柳。絮。常。小。浪。子。の。心。を。牽。楚。館。の。舞。華。能。富。翁。の。産。を。湯。と。し。こ。れ。が。賢。と。あ。り。愚。と。わ。く。貴。と。あ。り。賤。と。あ。り。此。殊。境。小。迷。來。る。者。ひ。き。も。も。と。と。と。恰。も。蝦。蟄。の。井。お。ち。ら。ひ。つ。が。と。と。く。飛。蛾。の。灯。お。集。る。ふ。似。たり。あ。み。この。人。の。ほ。ど。つ。る。う。ち。お。一。ま。い。目。だ。ら。た。る。打。扮。の。侍。あ。り。春。雨。お。煎。子。の。飛。か。さ。ぬ。を。摺。て。三。本。傘。の。麻。子。紋。つ。け。た。る。小。袖。を。着。し。白。柄。の。大。小。を。摺。差。お。さ。ら。じ。洲。の。与。三。あ。ら。り。製。し。けん。手。以。た。ら。る。時。絵。の。一。つ。印。並。電。を。お。び。深。編。笠。を。ま。ぶ。ふ。さ。そ。て。絡。つ。け。ど。の。緒。を。つ。け。た。る。板。金。剛。を。と。と。あ。ら。し。て。東。を。の。ど。と。と。と。と。と。と。又。西。の。方。より。羽。織。小。袖。も。一。様。小。村。

板金 剛 傘 下 類 職 人 一 番



だり雲小稲妻の閃きたる形をまきせたる釘線入たる袖をさしめけて  
 うすく着る。ちりんの鮫函の大小を圍の木におび目せし笠の下に懐  
 紙の覆面かけ。肩を首より高くはしりて六方めぐるし小手をあち  
 つ大路せほと歩こ来る侍あり。已ふ西人おれちひけり時三本傘の  
 紋はけたる。その侍の刀の鞘み鞘とはじき打  
 のてけるが雲小稲妻の侍。その瑞をまるとあざり臂をやりつて  
 怒れる体あり。その手はひのけておんとことば。あつたまは様  
 臂を伸して引さむ。たがひふ口あ一言といふごとといども。つひ刀を抜は  
 て丁と志と打あひけり。群集の諸人うれをうて。その誼諱よとさ  
 を立東西散乱して。ひりた大路み只西人うけり。あざつ。斬むとごと  
 つども。西人の猛死勢おとせして。誰ひとりともれをささむる者ありけり。

時ふ曲中第一の名妓とよみぬ。その名をふかるとある。神林道順が  
 おと方葛城といふあそび女。離のうらも此体をえて。いそげしく裙を  
 そして出来り。いそあやうげなる剣の下をぐるも。西人のなごごと  
 あり。鴛鴦の囀出たるがどに声してひひけり。お二方もおはあうげなる  
 おん方と見ええづる所ともさうひあつた。又傷をおびあつた。おしめり  
 たがひあやあつた。いそ宿恨のあつたあつた。いそ誼諱の妻おむ  
 かりて双方ともおん刀をおさめた。おと方と笑敷つてさうあけり。  
 西人の葛城が理ある詞を耻けん。おん音をあそびひとくおと方と  
 つ刀を撃おちらて。衣服の塵を打払ひ雲小稲妻の侍の出口の方  
 へつりぬ。三本傘の侍も退つた。おと方を葛城袖をさうとさうと  
 とも。かゝる編笠茶屋おめてゆたて。あはれの女おと方とさうとさうと。





京五條坂の  
 曲中お抄の  
 鞠當誼譚  
 の圖

名古屋巻



所がらこそ物馴たは女有れば。物語一巻といひて出たぬ。あそこを  
 別子人もあければ。昔昔城の侍もむうひ卒尔ありと。いども。さひし度吉又  
 のらんがうり。妻へ葛城と申さあそびあるが。おん身三本傘の紋つけあふふ。  
 若名古屋山三郎どのあへあふと。いふかの侍打開てさそへ同井びる  
 葛城どのあふ。おことい山三郎お何の所縁ありたが。や。推量の  
 ごとく。其い山三郎ありと。編笠をされば。昔昔城をたれと。おまのり  
 幼時つれなれども。面いあふと。おあへぬ。姓名いおほじ。おん方あれども。  
 おん身い妻がたが。ゆる人あふと。疎忽のなんいおほじ。あれ妻い大和の  
 国佐と木の家臣。名古屋三郎左衛門どの。子息山三郎どのと。おまのり  
 時のひあがけの殿も。あふ。たがねん。なるなりと。おいあけふ。又へけと。い  
 かの侍眉をまのり。あふ。のらん。おん身い和州子守町の浪人。高間久米

右衛門どの息女あて。幼名を岩橋といふ。むと。つが。昔昔城おど。あふ  
 ありて。おん身いさ。ぐり。定妻が。出をよ。と。ありあふ。や。と。つが。おあ。あ。侍掌  
 を。と。と。打誠。お不思議の。出合あり。今い何を。つ。と。あ。某いおん  
 身のた。ぐ。子。あ。ふ。佐。と。木の。家臣。名古屋三郎左衛門。正春。この。僕。麻。花。こ  
 中。と。者。あり。あ。ね。て。山三郎。どの。幼年の。時の。ひ。あ。が。け。の。女子。あり。こ。同。い  
 身。あ。て。あり。け。る。某。い。お。あ。お。あ。て。今。世。い。此。曲。中。へ。あ。り。い。あ。い。ら。れ  
 あ。ふ。さ。あ。る。り。先。年。主。君。三。郎。左。衛。門。殿。佐。と。木の。お。ん。家。の。執。權。不。破。道  
 大。が。児。子。伴。左。衛。門。が。為。お。闇。打。あ。ひ。あ。ひ。その。夜。お。ん。館。の。駿。動。に  
 あり。て。山三郎。どの。浪。く。の。身。と。あり。あ。ひ。敵。伴。左。衛。門。が。お。く。と。お。ん  
 ため。所。く。か。ぐ。を。め。ら。ぐ。と。旅。路。小。月。日。を。お。り。あ。ひ。が。近。ご。ろ。当。国。小。幡。れ  
 里。お。か。ぐ。と。住。あ。い。某。い。その。所。お。は。へ。と。え。あ。う。お。ん。頃。日。人の。噂。を。因



伴左衛門雲小指毒の模様はけたる衣服を着しては曲中へ往来  
こと侍は、いと敵とわたり侍を以て人の又知となる衣服着てあり  
人立ちおち所を徘徊するありえん。この假人よて山三郎の  
をほそおしめておしおきまに謀計とよひ由る某持傳へなる一腰  
を代り主人の紋有人の又知り侍衣服をうへてつくたる男  
のき侍ふ打扮山三郎ぶみとえせてけしもははまりけ侍折よく侍ふ  
由たのひ。つぎと鞆当として誼華を仕うけあろろふ。おと始終の  
深編笠あまの面はまるとええされども。おのちとに恰好果して伴左衛  
門ふわじむ小指の光をえれば伴左衛門が腹心の傍輩大上雁八といふ  
者ふ疑はしとて、おと日暮昌城の涙をちげし山三郎ぶみの妻七才の時おく  
の七をうけてつひあぐけはる夫たりけむ。川竹の才となりても片

時も忘るひぬあり。せめて一目相見んとはぬけひけとも。籠電ふか  
向う鳥の才たれば。せんごんかくむ。ほしく月日をおとせける。そのち同は  
父うつを打とむひて。そのおもむくへ志をむかひて。同い急殊更  
おたしく何とぞ一度あつてもおふまじも。おたんと神仏も祈てあけられ  
只そのまのこをねがひね。けしもをうとぶとけんおあひひのうと縁の尽さ  
所なりといひて。或はあましく。或は喜び。その才親の貧苦をるふ忍びむ。  
ふらうは曲中ふ才を賣たる。はじめ終をこへうふか。お侍と  
かりて。都合さ侍も打りておせかれども。妻が心の実をよしく告るこ  
へて。せめて一目あひ見るまをむかひて。涙かろふおつれ  
ふども。けしむ。麻花もその志の實を感じて。共お袖を志やりぬ。昌城  
又ひける。おと侍の伴左衛門といふ。妻同の今がはじめあり。さきおの侍



山城の国  
小幡の里  
山三郎  
貧家の  
光景



麻花



山三郎



のこと深編笠み敷かへし。雲の不の稀妻の衣服着なり侍五人。一  
 様打扮て。頃日の傍に。此曲中小往来を。そのうち一人へまことの  
 伴左衛門にかまへしと云は麻を裁りを同五人の者一人の伴左衛門を。  
 残る四人は深に眉三平笠野蟹籠土子泥助犬上雁八といふ者不疑は  
 此皆助太刀して三郎左衛門のをおたる者も之正是天の与へ  
 るりとまび壁み耳あ垣みひめあこといハ此所で長物語い  
 あしめんかさねを又相まく人やえんといひて立上目は葛城袖みか  
 是今のひしこといひてたのむあはしは麻を裁りうちがれ又編笠みか  
 敷かへして出しけは葛城の神林が家みつとぬ



